

一

次の――線部のカタカナは漢字に直し、――線部の漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- ① 人質をカイホウする。
- ② 病気がカイホウに向かう。
- ③ 公園を市民にカイホウする。
- ④ 負傷者をカイホウする。
- ⑤ 犯行の動機をツイキユウする。
- ⑥ 利益をツイキユウする。
- ⑦ キリツ正しい生活を送る。
- ⑧ キリツして来賓を迎える。
- ⑨ 回顧録を出版する。
- ⑩ 経過を克明に記録する。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問題では句読点も字数に含むものとします。

保健室に駆け込むと、部屋にはおとなのひとが二人いた。おじさんとおばさん。椅子に座って、ヒデおばと話していた。びっくりにしてわたしを振り向く二人の間から、たっちゃんが顔を出した。

「あれえ？ カワムラさん、かえったんじゃないの？」

たっちゃんは思いがけずわたしが戻ってきてうれしそうだったけど、おじさんとおばさんは——それからヒデおばも、ちょっと困った顔でわたしを見ていた。

ヒデおばは「まあ、ちょうどよかったかもね」と言っ、わたしを手招いた。

「ちよつとね、河村さん、たっちゃんとベッドで遊んであげて。一人だと退屈しちゃって、すぐ外に出てきちゃうから」

ドロップスを二つもらった。オレンジとハッカ。二つとも、めずらしく最初から出して机の上のティッシュに載せてあった。

はい、とオレンジを渡そうとしたら、たっちゃんは「ぼく、そっちにする」とハッカのほうを指差した。

「ハッカでいいの？ 『はずれ』だよ」

「うん、へいき」

たっちゃんはわたしの手のひらからハッカのドロップすをつまんで、おじさんとおばさんに「みて、みて」と言った。「パパみて、ママみて、ハッカなめちゃうよ、ぼくできるんだよ」——両親だったんだ、この二人。

たっちゃんはブドウを食べるときみたいに顎を上げ、くちびるをとがらせて、ぱくつとドロップすを口に入れた。

顔がしょぼしょぼとしぼむ。でも、吐き出さずにがまんした。「すごい、たっちゃん」とお母さんが拍手をした。その顔をちらつと見て、気づいた。お母さんの目には涙が浮かんでいた。

わたしたちがベッドに入ると、ヒデおばはふだんは使わないカーテンを端から端までぴたりと閉めた。

外が見えない。でも、たっちゃんはそれが逆に気に入ったのか「ひみつきちみたい」と笑って、ベッドに座ったまま掛け布団を頭か

らすっぱりかぶって、あかきんちゃんみたいに顔だけ出した。

「あのね、ぼくね、しゅじゅつするの」

いきなり——。

「あしたからにゆういんするの、おばあちゃんちのちかくのだいがくびよういんに」

笑いながら——。

「それでね、えーとね、インナイガッキューっていうのがあるの、そこ。びよういんのなかのがっこうなの。しゅじゅつ、なんともしないといけないから、ぼく、そこにてんこうするの」

コリコリッ、とドロップすと歯が当たる音が聞こえた。ハッカ、おいしくない、と息をすうすう鳴らしながら、笑った。

両親と先生の話し声は低くて聞き取れない。ただ、お父さんもお母さんもヒデおばにお礼を何度も言っているような気配だった。もっと耳をすまして話を少しでも聞こうと思っていたら、廊下からばたと誰かが走ってくる音が聞こえた。

「すみません、河村さん来てませんか？」——予想どおりのひとだった、はあはあ、ぜえぜえ、と息を切らして、学校中走りまわっていたのだろう。

わたしはオレンジのドロップすを舌と上顎の間に押しつけて、たっちゃんにも、静かにね、と口の前で人差し指を立てて見せた。

「来てないよ」

ヒデおばは、そっけなく言った。

「そうですか……」と、細川先生の声は半べそをかいているみたいに震えた。

「でも、職員室で待ってれば来るわよ。待ってなさい」

「え、でも……」

「見てわかるでしょ、お客さんと話してるの。邪魔しないで、職員室で待ってなさい」

「来るって、なんでわかるんですか」

「あんたよりたくさん見てるからだよ、子どもを」

「そんな……わたしだって……」

「おなかが痛くて泣いてる子ども、何人見てる、あんた」

怖い声だった。

「膝をすりむいて泣いてる子ども、何人見てる」

もつと A。

②「子どもはにこにこ笑ってるだけじゃないんだ」

すごく怖い——けど、その声は、おじいちゃんとおばあちゃんとお父さんとお母さんをぜんぶ合わせたみたいなの、頼もしい声であった。細川先生がなにも言い返せずに立ち去ったあと、ヒデおばはたっちゃんの両親ともう少し話をしてから、カーテンを開けた。

「たっちゃん、そろそろ帰るって、お父さんとお母さん」

「ほくも？」

「あたりまえでしょ」

横からお父さんが「たっちゃん、ヒデコ先生にお別れしなさい」と言った。「いままでお世話になりました、って」

お母さんは黙って、ハンカチを目元にあてていた。

たっちゃんはお別れの意味がよくわからないのか、きょとんとしてうなずき、「ヒデコせんせい、またね」と手を振るだけだった。こっちのほうは悲しくなつて、たっちゃんの手術のことが心配にもなつて、胸が熱くなった。口の中でドロップスが溶ける。悲し涙が溶けて、広がって、染みていく。

ヒデおばは、白衣のポケットに手を入れた。

「たっちゃん、もうハツカのドロップス食べた？」

「うん、おいしくないからのんじやった」

「じゃあ、お別れだから、もう一個あげる」

緑の缶をポケットから取り出して、カラカラ、と音をたてて振った。

「たっちゃんがいちばん欲しいドロップス、言いなさい。それが出たら、手術が成功して元気に遊べるよ」
うそ——。

だめ、それ——。

「ほく、ブドウがいいなあ」

ほら、やっぱり。

わたしはあわてて口の中のドロップスを呑み込んで、ヒデおばに、だめです、やめてください、と言おうとした。でも、オレンジの甘みで口の中がべたべたして、呑み込んだドロップスも喉にひっかかったみたいで、声が出ない。

「なにが出てくるかわかんないけど、ブドウだったら、うれしい？」

「うんっ」

「先生もうれしいけどねえ、どうだろうねえ、うまくいくかどうかわかんないよ」

そんなのやめて。ゲームにしないで。絶対に負けるゲーム、たっちゃんにやらせないで。

ヒデおばは蓋を開けた缶をまた軽く振って、たっちゃんの手のひらに、ころん、とドロップスを落とした。

紫色のドロップス——「やったーっ」とたっちゃんは歓声をあげた。

ブドウ。間違いない。あの色、あの形は、ブドウのドロップスだった。赤い缶のやつにしか入っていないブドウが、緑の缶から出てきた。お父さんとお母さんも手を取り合って大よろこびだった。やったな、やったね、すごいな、よかったね、と二人とも涙声で B。
たっちゃんは、あーん、と口を大きく開けて、ブドウのドロップスを舌の先に載せた。口を閉じて、ぺろん、ぺろん、となめて、「おいしいっ」と笑った。

きつと、その味、うれし涙だ。そして——何週間か、何カ月か、何年先かわからないけど、たっちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人で手を取り合つてうれし涙を流すんだろうな、と思った。信じてる。③不思議な奇跡が起きたのだから、それ、信じていい、と思う。

たっちゃんが両親と一緒に帰ったあと、ヒデお婆は「あんたも食べる？」とドロップスの缶を差し出した。

「あの……」やっぱり、不思議だった。「なんでブドウが出たんですか？」

「なんでって、入ってたから出たんでしょ」

そんなことじゃなくて。わたしはドロップスの緑の缶と赤い缶の違いを説明して、緑の缶からブドウが出ることはありえないことを伝えた。

でも、ヒデお婆は驚いた様子もなく、「あんたのもブドウだよ」と言った。

「わかるんですか？」

「出してごらん」

缶を受け取って、手のひらに出した。一個だけのつもりだったけど、勢いがつきすぎて三個いっぺんに——ぜんぶ、ブドウだった。びっくりして、残りのドロップスも手のひらに出した。

ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ……。

C 隙に、ヒデお婆は机のひきだしを開けて、赤い缶のドロップスを

取り出した。

「たっちゃんがブドウが好きだっていうの、聞いてたから」

そっけなく言って、中身がぎっしり詰まった赤い缶を振りながら、「面倒だよねえ」とD。

「そこから出して……入れたんですか、こっちに」

最初から机の上に出ていたオレンジとハッカのドロップスは、赤い缶に入りきらなかったぶんだったのだろう。

「ちよつと、こんなにいっぺんに出しちゃうと、しけっちゃうじゃない」

叱られた。「食べるぶんだけ食べて、あとは中に戻しなさい」とにらまれた。でも、わたしと目が合いそうになると、そっぽを向いて、「ああ、もう面倒だった面倒だった」と大げさにため息をつく。

わたしはブドウを一個だけ口に入れ、あとはぜんぶ緑の缶に戻した。

ぺろん、ぺろん、と舌ではじくようにドロップスをなめていると、ブドウの味や香りと一緒に、自然に笑い声も出てきた。甘いなあ、

ドロップス。おいしいなあ、すごく。

ヒデお婆はそっぽを向いたまま「どうするの」と言った。「細川先生探しに来たの、聞こえたでしょ」

「はい……」

「職員室で待つてる、って。伝言、伝えたからね、あとはあんたが決めなさい」

違うじゃん、職員室で待つてろって言ったのヒデお婆じゃん。待つてればわたしは絶対に来るから、って言ったんじゃない。絶対に、とまでは言わなかったかな。

ぺろん、ぺろん、とドロップスをなめる。カチン、カチン、と歯に当たる。甘くて固くて、少しずつ溶けて、広がって、染みて。

「いつでも来ればいいから、ここに」

ヒデお婆は赤い缶をひきだしにしまつて、「でも、もうドロップスはあげないよ。あんた虫歯があるのに歯医者に行つてないでしょ」と、また怒った声で言った。「そういうの、ぜんぶわかるんだからね」

ぺろん、ぺろん、カチン、カチン。

「細川先生待つてるから、行くんだつたら早く行きなさい」

ぺろん、ぺろん、カチン、カチン。

ふふつと笑った。甘いものが口の中にあると、どうして頬がふわつとゆるむんだろう。

奥歯で噛んだ。かけらにして、ごくんと呑み込んだ。

ゆるすかゆるさないかは、まだ決めていない。ゆるしても、忘れない。たぶん一生。

でも、口の中に残った甘いブドウの香りが、行こうか、と言ってくれた。

わたしはランドセルを背負い直して、ぺこりと頭を下げた。

ヒデお婆は、『保健室だより』の古いのを読み返しながらか「ドロップスのこと、ナイショだからね」と言つて、じろつとわたしをにらんで、初めてE。

問一

空欄 A・B・C・D・E

答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

- ア ぼうぜんとしている
イ 怖くなった
ウ 笑った
エ しかめつらになる
オ よろこんでいた

問二

——線①「お母さんの目には涙が浮かんでいた。」とありますが、その時の「お母さん」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 病気を抱えながらも成長した姿をみせようと懸命に大人ぶり、ハッカのドロップスをなめて見せたわが子をたまらなく愛おしく感じた。
イ ハッカ味のドロップスを途中で吐き出して自分たちに怒られないよう、必死になってがまんしているわが子がかわいそうだった。
ウ 自分はあえて「はずれ」のハッカ味を選び、オレンジ味のドロップスを上級生に譲らざるを得なかったわが子がふびんだった。
エ 母親である自分の前でも本当のことを言わなくなったわが子の変貌ぶりに気付かないふりをしていたが、内心は悲しかった。
オ 苦いハッカ味のドロップスをなめれば薬代りになって病気がよくなると信じているわが子の純粋さが心に染み込んだ。

問三

——線②「子どもはにこにこ笑ってるだけじゃないんだ」とはどういう事が言いたかったのですか。最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 保健室には泣き顔の子どもがよく来て大変なので、大人は来るな。
イ 笑顔の子供より、泣いている子供の方が真実を語るんだ。
ウ すべての子どもに平等に接するより、泣き顔の子供を一番大切にしないさい。
エ 子どもたちを見た目だけで見るのではなく、内面にも目を向けなさい。
オ 笑顔の子どもたちは全て内心では泣きたい気持ちをはまんしているんだ。

問四

——線③「不思議な奇跡」について答えなさい。

(1) それはどういうことですか。 ① ② ③ ④ ⑤ に当てはまる言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ドロップスには ① 缶と ② 缶がある。 ③ 缶にしか ④ 味は入っていないはずなのに、たちちゃんが望んだ通りの味が ⑤ 缶から出てきたということ。

- ① ② ③ ④ ⑤
ア 緑の — 赤い — 赤い — ブドウ — 赤い
イ 緑の — 赤い — 緑の — ハッカ — 緑の
ウ 緑の — 赤い — 赤い — ブドウ — 緑の
エ 緑の — 赤い — 緑の — オレンジ — 緑の
オ 緑の — 赤い — 紫の — ブドウ — 緑の

(2) この「不思議な奇跡」が起こったのはなぜですか。本文中から読み取り四十文字以内で答えなさい。

問五 この文章を説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬態語や擬声語を一切使用せず、その代わりに会話文を多用することで登場人物の表情を想像しやすくしている。
- イ 大人になった「わたし」が小学校時代を振り返りながら語っている文章である。
- ウ 語り手が「わたし」、「たっちゃん」、「ヒデおば」と場面によってかわることで、緊張感が出ている。
- エ 「わたし」が「ヒデおば」と「細川先生」を比較しながら語ること、正反対な性格が分りやすく書かれている。
- オ 「たっちゃん」の言葉を平仮名や片仮名で表記することで、意味を理解しきれないまま話している様子を表している。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問題では句読点も字数に含むものとします。

あちらこちらで牛がのんびりと草を食^はんでいる。見渡す限りの草原をさわやかな風が吹き抜ける。窮屈^{きゆうくつ}で忙しい都会の日常生活から、そんな牧歌的な風景のなかに逃げ出したいと思^①っている方も多いだろう。

そのすべてとはいかなくても、牧歌的風景の一端には街のなかでも出会うことができる。それが街なかの牧草たちである。実は、都会の道端や空き地などに見られるイネ科の雑草の多くは、もとは牧草として活躍した経験を持つている。牧歌的風景を夢見る都会の現代人とは逆に、牧草たちは牧場を逃げ出して都会にやってきたのだ。

牧草にはイネ科の植物が多い。そもそもイネ科の牧草は、草食動物に対抗するために進化を遂^とげてきた植物である。植物の生長点^{※1}は一般的に茎の先端にある。しかし、それでは茎の先端を食^はられると生長が止まってしまう。そこでイネ科の植物は生長点を株元に配置することを考えた。一番低いところで生長点を守りながら、上へ上へと葉を押し上げる生長に切り替えたのである。これならば、先端をいくら食^はわれても生長を続けることができる。

さらに、葉は食^はべにくいように繊維を発達させてかたくした。しかし、草食動物も負けてはいない。そのかたい繊維を消化するために、牛は四つの胃を持つようになったのである。^②イネ科の植物の進化によって、牛もまた進化を遂げたのである。

しかし何という皮肉だろう。草食動物に対抗するために進化してきたイネ科の植物は、牛に食^はべられても、何度刈り取っても、すぐに再生してくるため、牧草としてもっとも適した植物として重宝がられるようになってしまった。^③イネ科の植物の血のにじむような努力は、完全に裏目に出してしまったのである。

明治時代になると、日本の牧場には外国からさまざまな牧草が導入された。しかし、牛に食^はべられ続ける生活にやるせなさを覚えてか、イネ科の牧草はしだいに牧場の外へ生活の場を求めていった。そして、道端や空き地などの雑草として広がり出したのである。

^④カモガヤも牧場を抜け出した牧草の一つである。牧場では「オーチャード・グラス」というしゃれた名前と呼ばれていた。生育が旺盛^{せいせい}で栄養価の高いオーチャード・グラスは牧草のなかでも優等生である。しかし、牧場の外で雑草化したオーチャード・グラスはカモガヤという名で呼ばれている。オーチャード・グラスは穂の形がニワトリの足のように見えるので、「コックス・フット・グラス」（ニ

ワトリの足の草」とも呼ばれている。ところが、コック（ニワトリ）をダック（カモ）と間違えられて、カモガヤと名づけられてしまったのだ。カモガヤの雑草生活は、とんだ勘違いからスタートしてしまったのである。

しかし、気炎を上げて都会に乗り出したイネ科の牧草たちは、いま勢い余って花粉症の原因として問題になるまでに繁栄している。カモガヤはまさにその主犯格である。

イネ科の牧草が進化した草原地帯に虫は少ない。代わりに風だけは休むことなく吹きすさんでいた。そのため、イネ科の牧草は風で花粉を運ぶ道を選んだのである。ただ、風で花粉を運ぶ方法は非効率なので、どうしても多めの花粉を生産しなければならない。人間の苦しみにおかまいなく、カモガヤは膨大な量の花粉をばらまく必要があるのである。

しかしである。あれだけ牧草がたくさんある牧草地帯で、花粉症は大きな問題にならないのに、なぜ都会ではこれほどまでに深刻な問題となるのだろうか。

水分を含む [] の上に落ちた花粉はふたたび舞い上がることはない。そのため [] の豊富な牧場地帯では、風に舞った花粉も地面に落ちてしだいに数が減っていく。ところが、都会には [] が少ない。乾燥したアスファルトやコンクリートに落ちた花粉は、風が吹くたびに何度も何度も舞い上がる。行き場を失って空気中をさまよう花粉は増え続けながら、何度となく人間に襲いかかるのである。

⑥ たしかにイネ科の牧草は花粉症の原因となる植物である。しかし、その責任はすべてイネ科の牧草だけにあるといえるだろうか。

美しい田園風景だった大地はアスファルトやコンクリートで塗り固められ、人間たちは無秩序に道路や建物を作っていた。そんな都会を緑で覆おうと、都会の牧草たちはわずかに残った土を選んでたくましく生きている。おそらくは脳裏になつかしい牧場の風景を思い描きながら、ふるさとを離れた牧草たちは、懸命に緑の復権に挑戦しているのである。

乾燥した地面をすばやく緑で覆う能力が認められて、イネ科の牧草は道路の法面や護岸、緑地などの緑化植物としても重宝がられている。

⑦ 緑の復元が叫ばれ、開発によって自然が壊された場所では、柵を緑色に塗ったり、緑のネットで裸地を覆う笑い話のようなことが行なわれた。しかし、イネ科の牧草による緑化も似たようなものである。

ふるさとの山を削り取り、野を埋め立ててから、イネ科の植物で覆い隠すだけでは、緑は戻っても、昔からあったふるさとの豊かな自然は二度とは元に戻らない。むしろ緑色の柵のほうが、苦肉のごまかしと誰にでも分かりやすいだけ問題は少ないというべきだろう。ところ構わず種を播かれて酷使されているイネ科の牧草にとっても、いい迷惑である。

そんな生活をカモガヤたちイネ科の牧草はどう思っているだろう。平凡な牧場での生活に戻りたいと嘆いていなければよいのだが。

（稲垣栄洋『身近な雑草の愉快な生きかた』による）

※1 植物の生長点：植物の根や茎の先端にあつて、活発に細胞分裂を行い、新しい組織を作るものになる部分。

※2 法面：土を削り取ったところ、また、土を盛ったところにできた斜面。

問一 — 線①「牧歌的」の意味として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵に描いたような

イ 夢に見たような

ウ 素朴でのかな

エ 動物のような

オ 歌に歌われた

問二 — 線②「イネ科の植物の進化によって、牛もまた進化を遂げたのである。」とありますが、具体的にはどのように進化したのですか。イネ科、牛それぞれについて、文中の語句を使い、文末を「～こと。」の形にして、三十五文字以内で答えなさい。

問三——線③「イネ科の植物の血のにじむような努力は、完全に裏目に出てしまったのである。」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア イネ科の植物が草食動物に食べられることによって、反対に草食動物が進化していき、草食動物をいっそう繁殖させてしまうようになったこと。

イ イネ科の植物が草食動物に対抗するために進化してきたことが、かえって草食動物に食べさせるのに都合のよい植物とされてしまうようになったこと。

ウ イネ科の植物にとって敵であった草食動物が、家畜として大切に牧場で飼われ始めたことにより、人間までも敵に回すようになってしまったこと。

エ イネ科の植物が進化することに合わせて進化していった草食動物が、外国から導入された別の種類の牧草のほうを食べるようになってしまったこと。

問四——線④「カモガヤ」について、このように名づけられた経緯を説明した次の文の中で、合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「オーチャード・グラス」というしやれた名前と呼ばれていた牧草と、カモガヤという名で呼ばれている雑草は同じ植物ではなかった。

イ オーチャード・グラスは生育が旺盛で、栄養価が高いが、牧場の外で雑草化したオーチャード・グラスは、生育が悪く、栄養価も低い。

ウ 「ニワトリの足の草」と呼ばれていたオーチャード・グラスが、いつしか「カモの足の草」と間違えられるようになってしまった。

エ 「カモの足の草」と呼ばれ、人々が軽く見るようになったため、雑草化したオーチャード・グラスとは区別するようになった。

問五——線⑤「人間の苦しみにおかまいなく、カモガヤは膨大な量の花粉をばらまく必要があるのである。」とありますが、それはなぜですか。それについて答えた次の文の空欄に当てはまる言葉を、文章中から二文字で抜き出しなさい。

イネ科の牧草は、多めの花粉を生産することによって、よく花粉を運ばなければならないから。

問六 文中の空欄（三箇所）に入る漢字一文字の言葉を、文章中から抜き出しなさい。

問七——線⑥「美しい田園風景だった大地はアスファルトやコンクリートで塗り固められ、人間たちは無秩序に道路や建物を作っていた。」とありますが、これと同じ意味を表す漢字二文字の言葉を、文章中から抜き出しなさい。

問八——線⑦「イネ科の牧草による緑化も似たようなものである。」とありますが、それはなぜかを説明した次の文の空欄に当てはまる言葉を、文章中から二十七文字で抜き出しなさい。

イネ科の牧草による緑化も、柵を緑色に塗ったり、緑のネットで裸地を覆うことと、表面をイネ科の植物で覆い隠すだけではないという点で似ていて、結局 から。

[illegible][illegible][illegible]